現地理解教育と国際理解教育の取り組み

前クアラルンプール日本人学校　教諭
福岡県福岡市立博多中学校　教諭　永　田　　朗

キーワード：現地理解，国際理解，現地校視察

１．マレーシア　クアラルンプールについて

マレーシアはマレー半島の11の州と連邦政府直轄のクアラルンプールからなる西マレーシア，そしてボルネオ島の北部を占める２州を含む東マレーシアから成り立っている。総人口のうち，66％をマレー系，中国系26％，インド系８％，その他１％で構成されている。多民族国家マレーシアでは，様々な言語が飛び交っていて，民族間では国語であるマレーシア語や，第１外国語の英語が広く用いられている。首都クアラルンプールは，緑に包まれた人口約150万人の大都市であり，日本人学校は市内から約30分車で走ったスバン地区に位置している。

クアラルンプール日本人学校

２．生徒の実態

生徒の学力は英語学習に対する意識が高いため英語は平均より高く，他の教科は日本の平均より高いものの，入学するのに入学試験が行われるわけではないために，日本と同じように学力が非常に高い生徒と厳しい生徒が混在する。また日本人が多く住んでいるモントキアラ地区に学習塾が３～４校あり，中１で50パーセント，中２，中３では９割程度の生徒が週３回ほど学校に塾のバスが迎えに来て生徒は学校帰りに直接塾に行き９時から10時くらいまで勉強を行っている。

生活指導の面では儀式的な行事や学校訪問をのぞいては普段の服装は私服である。校則がないために男子は長髪や茶髪の生徒，また女子は長髪でも髪を結ばず生活している。またピアスやネックレスをつけてくる生徒もいた。

東南アジアの中では比較的安全なマレーシアではあるが，夜生徒だけで歩くことは大変危険なため，深夜徘徊をすることはほとんどない。また日中も日本人学校の生徒だけで遊びに行くことはなく，ほとんどの生徒が遊びに行くにも親同伴か，友人宅まで送り迎えをしている。

保護者はほとんどが両親日本人であるが，両親の一方が日本人，もう一方がマレー系，中国系マレーシア人の家庭が１クラスに４～６家庭あり，平日は父親が帰宅が遅く，家庭と連絡と取る場合に日本語が通じない母親に電話でつたない英語で必要なことを伝えなければならないときもある。

３．現地理解と国際理解

①FRIM（マレーシア森林研究所）校外学習　中学校１年生

KL市内から車で30分程のところにある，約80年ほど前にスズ鉱山の廃山と野菜畑と森だった場所を森林研究者達の努力により1926年から長い年月をかけて今の森林に戻された。マレーシアの木や草，また動物，また昆虫に接することにより，マレーシアの自然について理解すると共に，動植物の生態系の学習を行った。

②現地校との国際交流　中学校２年生

小１から中３までの各学年ごとに国際交流が行われる。中２は首都機能のあるプトラジャヤにある全寮制男子校が本校に来校し，マレーシアの生徒からはマレーダンスを教えてもらった。また日本の生徒はソフトボール，切り紙，かるた等を教え，昼食は現地校の生徒と協力してカレーライスとそうめんをつくって食べた。現地校の生徒はイスラム教のために，普通のそうめんつゆでは，原材料としてみりんが入っているため使用することができない。（みりんにはアルコール分が含まれており，アルコール分を摂取することはイスラム教で禁止されているため）クアラルンプールのいろいろな日本食を取り扱っている店舗を回り，みりんが入っていないつゆを探すのに苦労した。

③盆踊り　中学校３年生

平成23年度で34回目となる恒例の盆踊り大会（主催・クアラルンプール日本人会）が７月18日，開催され，日本人とマレーシア人合わせて３万人以上が参加した。

舞台では，この日のために総合学習や昼休み放課後を使い，会場中央の櫓の上で，準備してきたゆかた姿の日本人学校女子生徒が踊りを披露し，はっぴ姿の太鼓の男子生徒が太鼓を叩いた。曲は，「大東京音頭」「東京音頭」「花笠音頭」「お日さま音頭」の４曲であり「お日さま音頭」は日本人学校が作った曲である。

事前に中学校３年生は盆踊り大会前に現地校を数校日本人学校に招待し，本校体育館にて盆踊りの振り付けを教え，現地校との交流を行った。盆踊りの振り付けの中で手をつなぐ場面もあり，イスラム教の生徒たちは公共の場で男女で手をつなぐことについて抵抗があったようで，特に女子生徒は男子生徒と手をつなぐのに時間がかかったり，最終的に手をつなぐことができない生徒もいた。

盆踊り大会当日には現地校生徒から代表生徒数名が櫓の上で踊れることになっており，代表になりたい生徒は特に一生懸命振り付けを練習している生徒がいた。

本番当日盆踊りが始まりだんだん夜が更けてきて，第２部，第３部ともなると，一般の参加者も第１部で踊りをおぼえているので，櫓の回りの輪が何重にもなり，とても大きくなる。３万人の輪がゆっくりと動き，曲が終わるたびに３万人の歓声と拍手が鳴り響く。マレー人やインド系マレーシア人，中国系マレーシア人が入り乱れ一緒に踊り楽しんでいる姿は壮観であった。

盆踊り会場の様子

④カンポンホームステイ（小学校５年生から中学校３年生の希望者）

「カンポン」とはマレーシア語で「村」「田舎」「ふるさと」を意味する。マレーシアの豊かな自然を感じ，大家族での生活体験をする２泊３日のホームスティが行われている。1993年に始まり，毎年夏休みに通常の観光旅行では体験できないマレーシア人の生活を体験するいい機会となっている。

通常マレーシアのクアラルンプールなどの大都市では基本的に英語が通用するため，生徒はマレーシア国内ではどこでも英語が通用すると考えている。しかしカンポン（村）では教育水準の違いがあり，英語が通じずマレーシア語しか通用しない家庭がかなりある。生徒は普段マレーシア語を使う機会がないためほとんど話せず，事前の学習会では本当に生活に必要な基本的なマレーシア語を練習しホームステイに臨んだ。

はじめはうまく言葉が通じなかったり，食事がすべてマレー料理だったり，シャワーが水しかでなかったり，見たことのない虫が出てきたりと不満もあったようだが，新鮮なフルーツを食べ，カンポンの子供たちと遊び，暖かいホストマザーと時間を過ごしていくうちにカンポンの生活を心地よいと感じることができたようであった。帰っ

てきてからも来年も必ずカンポンホームステイに参加したいという生徒がほとんどであり，マレーシアの現地理解と交流に満足していた。

４．現地学校視察

自分自身の研修として毎年夏休みにクアラルンプールの現地校を訪問した。同じ学校で毎年研修したため，現地教員とも仲良くなることができた。2 年目の訪問において突然ではあったが，現地校の先生の取り計らいにより，ティームティーチングのような形で一緒に授業を行った。製図の授業であったため難しい英語はあまり必要なく，製図のテクニックをペンで教えることができた。授業を行ったあとにマレーシアの「LIVING SKILL」（日本で言う技術・家庭科）の教材を現地の先生からもらうことができた。3 年目訪問するときには日本の教材をおみやげとして持って行き，日本の教材に使われている木の材質，名前などの話題で，外国の同じ教科の先生と話すことができたことは大変意味深かった。マレーシアの教科書を訪問前に読み，授業見学することにより，マレー語が分からなくても部分的に理解を深めることができた。

日本の中学校では技術の教員と家庭科の教員は別々の担当であるが，マレーシアでは「LIVING SKILL」の先生ということで両方教えなければならないことが分かった。1 時間目調理実習をして，2 時間目エンジンを教え，そして 3 時間目に商業の分野を教え，といろいろな授業の準備が大変そうであった。

また「LIVING SKILL」という教科は日本と同じで中学校の 1 年～ 3 年までの 3 年間，週に80分間学習している。教科書の内容については内容に関してかなり幅広く，たくさんである。日本と共通している加工技術，農業，調理，被服，住居など内容にやや違いがあるものの，共通している部分が多く見つけることができた。

また日本の教科書は基本的にさし絵の品物など授業に必要な写真について企業の名前やマークなどが見えないようにしたり，消したりして掲載することがほとんどであるが，マレーシアの教科書はほとんどの写真に会社名がそのまま表示されたままであることに驚いた。

日本の教科書に比べマレーシアの教科書の方が内容が高度であり，日本では授業時間数の関係で取り扱わなくなった部分も取り扱っている。日本は取り扱っている内容があまり高度でないことを感じ，マレーシアの中学生は高度なことを学習していると感じた。だた日本で今現在必要とされている省エネルギーについてなどの分野の取り扱いがほとんどなく，産油国であるマレーシアはエネルギーの面では日本と違いあまり危機感がないことを感じた。

５．派遣を終えて

自分自身派遣中に，国際交流のプログラムを生徒と行っていく中で，マレーシアの理解を深めることができた。私生活での友人もできて，一緒にスポーツをしたり食事をすることでマレーシア人の考え方などを知ることもできた。しかしマレーシア人の国民性，宗教的な考え方そして時間的な感覚の違いなどで自分の常識が通じず苦労したこともあった。

また我々教職員は日本の地元で行っている教育活動が普通だと考えている傾向がある。例を挙げると卒業式の後の学活に保護者が学級に入るか入らないかで，日本人学校内でもお互いを理解しなければならない事態もあった。双方の考え方として，保護者とともに最後の学活を行うことを当たり前にやってきた教職員にとっては，最後に保護者がいないことについては物足りないし，保護者がいないことを当たり前に最後の学活を生徒としんみり行いたい教職員にとっては，保護者のビデオやカメラのフラッシュが受け入れられないと互いの考え方を知ることができた。その他入試の書類の手続きなど細かいところなどで日本の各県でいろいろ違いがあった。国際的な理解も必要であったが，日本人学校教職員お互いの共通理解も必要であった。今まで自分のやり方は日本のやり方だと考えていたが，今回の派遣でそうでないことを感じた。最も強く感じたのは現地マレーシア人でKL日本人学校に25年勤めている校外活動のコーディネーターと会話したときであった。国際交流会の打ち合わせを行っているときに「日

本ではふつうこうしますよ」という言い方をしたときに，その方から「それは違います。先生の住んでいる地域でのやり方です。」といわれた。そして「今まで何人もの先生が日本から来られてふつう日本ではこうしています。と次々違うことを言われました。」と言われたときに自分自身「ハッ」とした。

自分は今まで「ふつうこうするでしょう！」という言い方を使ってきた。しかし考え直す必要があると感じた。日本人学校にきて，人にはいろいろなやり方があり，そしてそのやり方には意味も理屈もある。「ふつうはこうしますよ！」という言い方をすることで，自分のやり方でないことを排除していたことに気づいた。あらためて「ふつう」という言葉の意味を考え，感じることができた。

三年間の派遣生活の中で私を含め，家族も学校だけでなく日常の生活において日本ではできない有意義な体験をさせていただいた。特にマレーシアは多民族国家であり，各民族のお正月の時期が異なるために民族ごとのお祝いを見ることで文化，風習の違う中で国家として成り立っていることを強く感じ，国際理解及び民族文化について深めることができた。これも文部科学省，外務省，福岡市教育委員会，福岡県教育委員会，また在マレーシア日本国大使館およびクアラルンプール日本人会そしてクアラルンプール日本人学校の職員の方々のおかげであると深く感じている。